法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-06-01

脱ダム後の地域計画に関する地理学的研究

伊藤, 達也 / ITO, Tatsuya

(雑誌名 / Journal or Publication Title)
科学研究費助成事業 研究成果報告書
(開始ページ / Start Page)
1
(終了ページ / End Page)
4
(発行年 / Year)
2020-06-11

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 １１ 日現在

機関番号：３２６７５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ０１２３６

研究課題名（和文）脱ダム後の地域計画に関する地理学的研究

研究課題名（英文）Geographical Research about regional planning after stop dam construction

研究代表者
伊藤　達也（ITO, Tatsuya）

法政大学・文学部・教授

研究者番号：６０２２３１６１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,800,000円

研究成果の概要（和文）：　川辺川ダム計画の中止が決まった五木村におけるダム計画中止に対する村人の意識と、ダム計画中止後の地域社会の課題について研究を行った。具体的な研究としては、五木村での関係者からの聞き取り、資料収集のための国会図書館等での検索、120名を超える五木村村民へのアンケート調査、子守唄祭に来た600名を超える観光客へのアンケート調査が中心となった。
　さらに堰完成後の環境破壊に戸惑う韓国４大河川再生事業、堰完成後四半世紀にわたって開門運動の続く長良川河口堰、現在、建設を巡って大きな問題となっている石木ダム計画について比較検討を行うことによって、五木村の脱ダム後の地域社会の課題の参考とした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　川辺川ダム計画の中止が五木村に与えた影響は多大である。五木村に住む人々は計画の中止に強く影響を受けながら、地域社会の存続ならびに日々の暮らしの再建に取り組んでいる。本研究はそうした五木村の人々がダム計画の中止に対して、現在何を考え、何を望んでいるかについて明らかにした。こうした成果は五木村の今後の生活再建、地域の活性化に向けての政策に強く関係していると考える。
　また、関連研究として行った韓国４大河川再生事業、長良川河口堰の開門要求活動、石木ダム計画の問題点の解明は、五木村の事例が示すように、ダム計画がいかに地域社会に強い影響を与えるかを証明するものとなった。

研究成果の概要（英文）：　I studied about the villager's consciousness to the Kawabe river dam plan cancellation in Itsuki-mura and the problems after the cancellation. I did questionnaire surveys to Itsuki-mura people over 120 people and to tourists over 600 people, and the search at a National Diet Library for document acquisition,and the hearing from the leaders in Itsuki-mura in detail.
　In addition, I investigated the four major river restoration projects in South Korea that are confused by the environmental damage after the construction of the weir, the Nagara River estuary weir, which continues to try to release the weir after the construction, and the Ishiki dam plan, which is currently a major issue in construction. I conducted a study and clarified the magnitude of the problems of the dam plan currently underway in Japan, and used it as a reference for the issues of the community of Itsuki Village.

研究分野：経済地理学

キーワード：ダム問題　ダム計画中止　脱ダム　地域振興　川辺川ダム　石木ダム　韓国４大河川再生事業　長良川河口堰

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｆ－１９－２

１．研究開始当初の背景

わが国では大変長い年月を経て、ようやく脱ダム・河口堰の流れが形成されつつある。しかしながら、ダム計画は止まるようになった一方で、ダム計画中止後の地域存続を目指した地域計画の作成についてはほとんど手が付けられていない状況である。必要でないダム計画を止められるようになったことを評価すると同時に、ダム計画の存続を前提に地域計画が作成されてきた地域の「脱ダム後の地域計画」について焦点を当て、その可能性を科学的に論証する必要がある。

２．研究の目的

本研究では、ダム計画中止後の地域状況の整理を行った上で、脱ダム後の地域変化、地域計画の変化、計画の問題点、今後の方向性を明らかにすることを目的とする。研究対象地域 は、川辺川ダム計画が中止になった後、脱ダム後の地域計画作成に苦闘している熊本県五木村とする。

本研究では比較検討事業として、現在も地域住民が強力に反対しているにもかかわらず、建設が強行されている石木ダム問題、完成から四半世紀が経過したにもかかわらず、根強い反対運動（開門要求）の続く長良川河口堰問題、事業完成後、著しい環境問題が発生し、堰撤去を含めて激しく揺れ動いている韓国４大河川再生事業を取り上げて検討する。

３．研究の方法

本研究では、①文献等の読み込み、②統計資料の収集、③五木村地域有力者からの聞き取り、④五木村村民、五木村来訪者へのアンケート調査、⑤川辺川ダム問題の関係者からの聞き取り、⑥比較対象事業の検討、の 6 つの方法で研究を実施した。この中で①、②、並びに⑥はこれまでも、そして研究期間内においても継続的に実施した調査方法であり、③、④、⑤は研究期間内において計画的に予定し、実施した調査方法である。

研究期間内に実施した③、④、⑤を中心に述べるとすれば、以下のとおりである。研究期間初年度の 2017 年度は 2 度五木村を訪問し、主として五木村地域有力者への聞き取りと関係資料の収集を行った。また、2017 年度は比較検討事業の韓国４大河川再生事業の問題点について取りまとめを行った。

続いて 2018 年度には、11 月に調査協力者（大学院生）を得て、④の五木村村民、五木村来訪者のアンケートによる意識調査を行い、五木村村民から約 120、五木村来訪者から約 600 の回答を得た。その後、本務校にて分析を行い、貴重な結果を得ることができた。同じく 2018 年度は比較検討事業の長良川河口堰問題について取りまとめを行った。

研究期間最終年度にあたる 2019 年度は引き続き、③五木村地域有力者からの聞き取り、⑤川辺川ダム問題の関係者からの聞き取り、並びに④の五木村村民、五木村来訪者のアンケートによる意識調査の分析の継続を行う予定であったが、③、⑤がコロナ問題の影響から結果的に実施できなかったため、④の分析を中心に行った。③、⑤の代替としては、ホームページ等からのデータ収集を行った。さらに 2019 年度は比較検討事業の石木ダム問題についての取りまとめを行った。

４．研究成果

川辺川ダム計画の中止に伴い、熊本県五木村では、それまでの川辺川ダムを前提とした地域振興から脱ダムに伴うダムなき地域振興へと舵を切ることとなった。五木村では熊本県の協力のもと、様々な地域振興策がとられているものの、我が国最高レベルの過疎化、高齢化等によ

り、必ずしも順調に地域振興が果たされてきたとは言えない。

本研究ではこうした状況下にある五木村において、五木村の地域有力者（村長、村議会議員など）はどのような意識の下で地域振興に取り組んでいるか、五木村村民はこうした状況をどのように把握し、考えているか、五木村に訪れる人々は五木村をどのように評価しているかを中心に、主に聞き取り並びにアンケート調査から明らかにした。

五木村の地域有力者において、最も大きいのは「とまどい」である。これまで川辺川ダムを前提に地域振興、むらづくりを考えてきたが、ダム計画の中止に伴い、全く別の地域振興策を模索しなければならなくなった。五木村は熊本県からの資金援助によって、バンジージャンプ施設、宿泊施設、公園の整備等を進めてきた。ただ、これら施設は整備から日が浅いため、政策評価は難しく、現在の方向性に対してまずは進めていかざるを得ないという理解である。ただ、中には「まだダム計画が完全になくなったわけではない。将来的に改めてダム建設が再浮上するかもしれない」と、現状計画の前提を危惧する意見も存在した。

五木村村民たちの五木村に対する意識は非常に高い評価であり、現在地での居住の継続を強く望んでいる。一方で人口が 1,000 人を切る状況と著しい高齢化の進展に対して危惧する気持ちも強い。また、毎年 11 月に行われる「五木村子守唄祭」に訪れた観光客約 600 人に対して行ったアンケート調査からは、五木村の自然環境に対する評価の高さが際立った。ただ、回答者の属性として圧倒的に高齢者が多く、それは子守唄祭に訪れた全体の観光客の状況を代表している。今や五木の子守唄を知らない世代が多数を占める状況となっており、五木村の観光戦略が大きな転換点に差しかかっていることが推測された。

こうした様々な意見を組み込みながら、五木村の今後の方向性を考えていく必要がある。その点で、一部に残っている川辺川ダム計画の復活に関しては、比較検討を行った韓国４大河川再生事業における環境破壊、長良川河口堰完成後四半世紀にわたり続く開門要求、さらに近隣の長崎県で建設を巡って大問題となっている石木ダム計画の事例が参考になった。ダム・河口堰は完成に伴い、必ず環境破壊を伴う。そしてそれは一時的ではなく将来にわたって当該地域を苦しめていく。ダム建設自身、地域に大きな傷跡を残すものであり、それは五木村が数十年にわたって経験してきたことでもある。まずはダム計画を完全に止めることが五木村にとって重要であると考える。

五木村は川辺川ダム計画によって翻弄され続けてきた。五木村村民はダム計画に強く影響を受けながら、脱ダム後の地域社会の存続ならびに日々の暮らしの再建に取り組んでいる。本研究はそうした五木村の人々がダム計画の中止に対して、現在何を考え、何を望んでいるかについて明らかにしたが、こうした意識を五木村の今後の生活再建、地域の活性化に向けての政策にどのように反映させていくべきかについては、まだ検討途中である。今後さらに分析・検討を行い、一定の方向性を探っていきたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 伊藤達也	４．巻 72
２．論文標題 韓国の水辺環境改変事業の特徴－韓国４大河川再生事業を事例に－	５．発行年 2017年
３．雑誌名 地理科学	６．最初と最後の頁 120、133
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.20630/chirikagaku.72.3_120	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 伊藤達也	４．巻 78
２．論文標題 長良川河口堰最適運用方法の模索	５．発行年 2019年
３．雑誌名 法政大学文学部紀要	６．最初と最後の頁 135、147
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） info:doi/10.15002/00021789	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 伊藤達也・富樫幸一
２．発表標題 石木ダム計画の検証－水資源開発計画の側面から－
３．学会等名 経済地理学会関東支部7月例会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考